◆漁業士活用育成事業

平成２０年度九州ブロック漁業士研修会報告

水産業改良普及センター　與那嶺盛次

１．日程

平成２０年８月２２日～８月２３日

２．開催場所

福岡県水産会館（福岡県漁連）５階大会議室

３．参加者

渡名喜盛二（久米島漁協指導漁業士）
與那嶺盛次（沖縄県水産業改良普及センター水産業普及指導員）

４．内容

九州各県から漁業士をはじめ普及指導員等６０名が参加した。今回の研修会は、パネルディスカッションはなく、講演を中心に実施された。

最初に志摩町役場の畑中課長補佐より「漁業者自らが価格設定“ＪＦ糸島　志摩の四季”での直販事例」の報告があった。姫島は限界灘に浮かぶ周囲3.8キロ、人口200人の島である。本島側のＪＦ糸島直売店“志摩の四季”に委託販売を行い、雑魚等も漁業者自らが包装し出荷することによって販売が可能になり、売り上げを伸ばしていた。

引き続き福岡県水産海洋研究センターの徳田専門研究員より「朝市等の直接販売の現状と問題点」と題して福岡県の直売所や朝市の実情をアンケート等で調査した結果の報告があった。魚を三枚におろすサービスやレストランを併設しているところが繁盛していた。

その後、水産庁の田口普及係長より「今回の燃油高騰に対する緊急対策について」の報告があった。漁業士からは、緊急対策の対象としてグループだけでなく漁業者個人に対しても適応できるようにしてほしいとの要望が多く出された。１日目の研修会終了後、懇親会を実施し各県の漁業士と活発な意見交換を行った。

２日目は糸島漁協加布里支所の古藤支所長より「加布里湾の『天然蛤（ハマグリ）』について」の講演があった。天然蛤の資源管理に取り組み、資源の回復後流通販売の改善にを行い、漁業経営の安定を図っていた。その内容は高齢者による省エネ漁業と福岡魚市場に出すだけではなく、値段の高い京都魚市場への出荷や宅配を利用して高価格販売を実現したというものであった。

最後に、各県からの漁業士活動状況の報告があり意見交換を行った。各県、漁業士関連予算の削減、活動のマンネリ化、参加漁業士の固定化に悩んでおりその対策に取り組んでいた。九州８県中６県で女性漁業士が認定されていた。

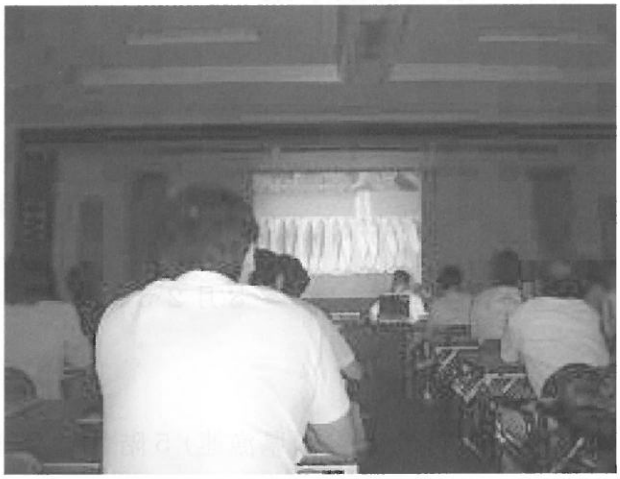
５．所感

今回の研修会で特に感じたことは、漁業者自らが積極的に流通販売に関わらなけば売り上げを伸ばすことはできないということでした。

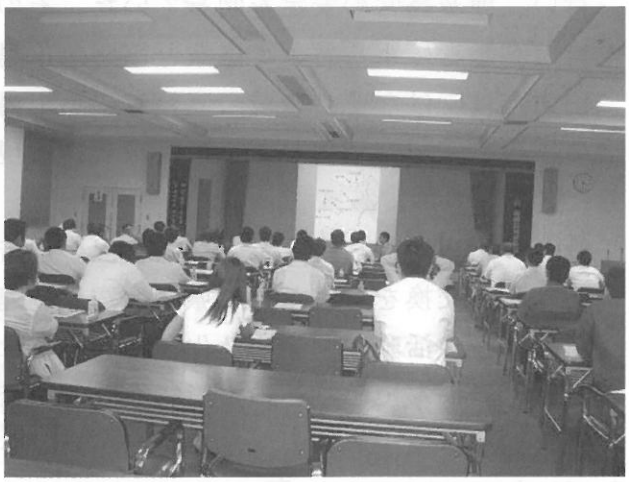
本県においても漁獲してセリに出すだけでは価格が維持できなくなっており、直売店を立ちあげて成功しているところもある。朝市等についも検討する必要があると考える。

養殖物についても加工等による付加価値をつけた販売や今までにない流通ルートの開拓などを行う必要があると思われる。

①“ＪＦ糸島　志摩の四季”直販事例報告



②“ＪＦ糸島　志摩の四季”への出荷



③朝市等直接販売の現状調査報告

④燃油高騰に対する緊急対策報告

⑤意見交換の様子

⑥加布里湾の「天然蛤」についての報告